
酪農の未来

明治大学 農学部 食糧環境政策学科 3年 畑中 梨絵

「健土健民」。通っていた高校の付属農場に額がかかっていた。

高校は全寮制の酪農経営科で学び、酪農家で年数回の実習があり、最終的には欧州で修学旅行代わりにファームステイをした。幸運なことに、私の実習先は良い農家ばかりで、酪農経営には多様な考え、形態があることを知った。そして、「私なら自分の地域に合う形態でこうしたい」「こうするのにな」という考えが出てくるようになった。いつしかその可能性に魅せられ、酪農の雑誌や本にかじりつく自分がいた。

そんな高校時代、講演会で酪農経営者の方たちと交流できる機会があった。とても楽しい日であったのに、私はショックを受けた。女子生徒と男子生徒に対する経営者の皆さんの接し方が違ったのだ。男子は後継者と思われているのだけれど、一方で女子は「どこかに嫁ぐ」「真剣に酪農に向き合っていない」「将来は主たる経営者になるはずがない」という考えが伝わってきた。まだ世間ではそういう認識なのだ。「女が経営者になってはいけないのか」と、ひどく衝撃的であり、私がいかにそれまで狭い世界で生きてきたのか気づいた日になった。

そんなことがあった日も見ていた「健土健民」の額縁。健康な土、健康な民は今もあるのか、そして未来も保ち続いていくことができるのだろうか。

私は日本最北端稚内市の隣町、北海道豊富町にある酪農家の三人兄弟の真ん中として生まれ育った。両親は、父が四国、母は東北、ともに非農家生まれである。父は有名な酪農家であった叔父に幼い頃から憧れを抱いて酪農経営をすることが夢であり、高校卒業後に運送会社で働いて資金を貯め、その後全国の酪農家で10年間実習した。十勝で実習していたときに北海道に旅行に来ていた母と偶然出会い、母の両親に反対されながらも数年後に結婚した。そして、姉が生まれる年、今から23年前に豊富町で本格的に新規就農したのである。現在、経産牛120頭、未經産牛90頭、採草地、放牧地合わせて100haの比較的大規模な経営をしている。乳呑み児を抱えながら新規就農し、ここまで来るにはたいへんな苦労があっただろう。

幼い頃、両親に「おかえり」を言いたくて、牛舎の明かりを見ながら夜中まで待っていた。時計も読めないはずなのに、針が11時を指していたことを覚えている。昼間は牛舎周辺で牧草ロールの上で遊んだり、草地を走り回って牛を集めたり、子牛のほ乳や掃き掃除などの些細な手伝いをした。以前母が「よく三人とも無事に育ったね」としみじみ話したことがある。他人が聞けば日本とは思えないかもしれないが、広い敷地内で野放し状態だった私たち三兄弟は、何度も死にかけることがあった。

私は、親としても経営者としても尊敬する両親が懸命に築き上げてきた酪農経営を継ぎたい。しかし、そこには「不安」や「焦り」がある。知識をいくら追い求めても出てくる「不安」や「焦り」もあるが、さらに近年はTPPに関する議論などが盛んに行われており、政府の判断一つで海外の安い農産物が大量に輸入されてしまう今の状態に「不安」が募る。輸入が拡大すれば、国は農家に対し補償と称し支援してくれるだろう。具体的には、輸入品のために価格が低下して所得の減少した農家に対する直接支払いなどである。しかし、それはいつまで続くのだろうか。国の財源に頼った経営は、明日をも知れぬ非常に不安なものである。また、補償するとしても、大規模化を促している政府は大規模農家を優先的に扱うだろう。酪農家に限らず、多くの小さい農家が辞めざるを得なくなる。

国際的な競争力を持つために大規模化が必要だ、ということに私は疑問を感じる。広大な土地と莫大な資金を持つ新大陸の農業と、競争できるとは思わない。

むしろ日本のような、零細で多種多様な農業にこそ活路が存在するはずだ。農業が若者に敬遠され後継者が育たない中、日本の農業はどんな方向に進むべきなのか、そして私はどんな酪農経営をしたいのだろうか日々私の中で葛藤がある。

毎日、牛の体調を管理し、子牛の出産を見守り、手伝い、育て、一緒に生きていく。牛は酪農家にとって人生の伴侶である。私は、多くの牛たちに今まで養ってもらってきた。いや私だけではない。本来母牛が自分の子のために出している乳を飲み、乳から作られた多くの乳製品を食べ、肉を食べることで、私たち人間は生きてきたのである。これは、牛自身の意思ではない。だからこそ、私たち人間は牛に責任を持たねばならない。

牛にとって一番の幸福とは何であろうか？一概に決めつけることはできないが、牛たちは空の下で自由にいることを好む。春になり、外に放牧すると牛たちは一列になり、草地の際に沿ってまず巡回する時、表情は読み取れなくとも喜んでいることが分かる。柔らかな大地の上でスキップのように飛び跳ね、尻尾を振るのだ。見ているこちらが嬉しくなる。これを奪ってはいけない。

人の幸福とは何であろうか？できるだけ多くの収益、世間的な地位の確立、機械化によって楽をしたいなどは、人間なら本質的に持っているものだと思う。しかしこれだけではないはずだ。仕事をして汗を流すこと、牛たちが健やかに成長してくれることも利益以外の喜び、幸せなのだ。

両者を幸福にするためには、どの酪農がよいのか。わが家では、将来は搾乳ロボットを導入して何百頭もの牛を飼うという話も出ている。でも、たくさんの牛を舎飼し、水の管理をし、餌にカビが生えないかを心配し、給餌の栄養バランスを考え、寝床であるベッドを整え、毎日大量に出る糞を掃除する。機械化することで人数は少なくできても、一人が担当する仕事は山のようにある。大規模化すれば畜舎建設に莫大な費用がかかり、また、大型

機械などの資本投入が必要になる。また、乳量・低価格重視のため、海外の濃厚飼料が必要不可欠なものとなるが、バイオエタノールや人口急増のため世界的に価格が高騰する穀物を与える方法が、50年後も続く未来ある酪農であるとは思えない。大規模化が今後生き残っていく唯一の道ではない。

今こそ、それほど大規模ではなく、放牧を中心とした粗放的な酪農経営に目を向ける時が来たのではないだろうか？放牧型酪農は極端に巨大な建物や機械は必要としない、労働粗放的でもあるということ、また荒れ果てた山地に放すことで牛の蹄で土地を整え、そこで食べた物を牛が糞として排出したものが肥料になり、循環する。

「健土建民」健康な土と健康な民。豊穡な大地を人は生かし、そして生かされてきた。科学や技術が発展し、私たちは忘れてしまいそうになるが、その事実を忘れてはならない。健康な土にしか健康な民は存在することはできないはずだ。

問題は、あまり儲からないことだ。現在のような不安定な情勢の下では、儲からない酪農では生活が成り立たない。だから、大規模化も選択肢の一つであると思う。しかし私は、前述したように牛と人間、両方の幸福を確立したいし、その義務があると思う。

私が考える未来ある酪農は、牛は放牧し、施設はできるだけ簡単なものにし、濃厚飼料は必要最少のラインで給与する。酪農家自ら牛乳を加工し、「放牧している健康な牛の牛乳」に付加価値をつけることで、放牧により減った乳量分の収益を補填することだ。

そのことにより牛は、過剰な生産を強いられることがなくなる。そして人は牛から得た牛乳を加工し、販売することで、乳価や穀物価格に一喜一憂することなく、安定した経営を自身で築きあげることが可能になる。さらに、新たな楽しみが増えると思う。加工販売を自らすることで、やりがいや、消費者と関わることによって、今まで聞こえなかった様々な声を聞くことが可能になるからである。牛たちの管理に追われ疲れるのではなく、自分の時間を確保しつつその中で収益を上げることを考えるべきだと私は思う。

これを実現するためには、難しい問題が山積している。しかし、自分たちで販路を確保し、消費者との絆を持つことは、経営者の充実以外に農業地帯の魅力の発信にもなり、後継者や新規で始める人、人が集まることでその地域は明るく、より魅力のあるものになると思う。誰かが変えていかねばならない、誰かが行動していかねばならないのである。極端に言えば、まだ進出が気薄である女性視点で酪農を展開していくことで新しい酪農の可能性、形を広げていく可能性があるのではないかと思うのだ。

人や牛や地域、大切なものを守るため、これが私にとっての最良の形であり、今後を生き抜くための提案である。
